

徒然草

第百五十二段

西大寺 静然上人、腰かがまり眉しろく、誠に徳

たけたるありさまにて、内裏へまるられたりける

を、西園寺内大臣殿、「あな、たふとのけしきや」

とて信仰のきそくありければ、資朝卿これを見
て、「年のよりたるに候」と申されけり。後日に、

むく犬の浅ましく老いさらばひて、毛はげたるを
ひかせて、「この気色けしきたふとく見えて候」とて、
内府だいふへまるらせられたりけるとぞ。

〔口訳〕

奈良西大寺の静然上人が、老いなされて腰はまがり、眉毛は白
くなり、見るからに高徳の僧らしい有様で、京の御所へ参られ
たところが、その姿を見た西園寺内大臣実衡公が、「噫、尊い

上人の御様子であるよ」といつて、上人をありがたく思ひ、信仰したらしい様子があつたので、資朝卿はこれを見て、「何、それは上人様が単に年老いなされたからである、少しも偉いと云ふほどではない」と申しなされた。それから後日になつて、資朝卿は深毛のむく犬の、あまりにひどく年老い、瘦せて骨だけになつてゐる犬を、下僕に引かせて、「この犬の様子がまことに尊く見えます」といつて、西園寺内大臣実衡公にお贈りになりましたといふことである。

第一百五十三段

ためかねのだいなごんにふだう
為兼大納言入道めしとられて、武士どもうちか
こみて、六波羅へるて行きければ、資朝卿一条
わたりにてこれを見て、「あなうらやまし。世に
あらむ思出、かくこそあらまほしけれ」とぞいは
れける。

為兼大納言入道が北条方の武士に逮捕されて、大勢の武士共が取囲んで、六波羅に連れて行つた時、資朝卿が京の一条通りのあたりで、この有様を見て、「噫、うらやましいことである。この世に生きてゐる思出として、どうか自分も斯くのやうにありたいものである」といはれたのであつた。

此の人、東寺とうじの門にあまやどりせられたりけるに、かたは者どもの集まり居たるが、手も足もねぢゆ

がみ、うちかへりて、いづくも不具ふぐにことやうなるを見て、とりぐくせものにたぐひなき曲者くせものなり、尤も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがて其の興きやうつきて、みにくくいぶせく覚えければ、ただすなほにめづらしからぬ物にはしかずと思ひて、帰りて後、この間植木あひだうゑきを好みて、ことやうに曲折きょくせつあるを求めて、目をよろこばしめつるは、

かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢にうゑられける木ども、皆ほりすてられにけり。

〔口訳〕 この資朝卿が、東寺の門の下で、雨の降つてゐるのを晴らしてをられた時に、そこに不具の者どもが沢山集つてゐた。その者どもは手も足もねぢけたり、歪んだり、或は手足がそり返つた

りして、からだ中どこもかしこも不具で、普通の人間の有様とは異つてゐるのを見て、それは、どれもこれもそれぐに無類な変り者である。大に愛する価値があると思つて、じつと見守つてゐられるうちに、まもなくその興味もなくなつて、如何にも見にくく、気持悪いやに感ぜられたので、何でも只すらりとして、ありのままで珍奇でないものに勝るものはないと思ひなされ、家に帰つてきてから後、この頃自分が植木を好んで、妙に風変りな曲りくねつたおもむきのあるのを求めて、それを眺めてよろこんでゐたのは、つまり彼の不具の乞食どもを愛す

るのと同じことである。とつまらなく思はれたので、早速植木鉢に植ゑられてあつた植木どもを、皆掘り出して捨ててしまひなされた。如何にも尤も至極なことである。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『最新研究徒然草詳解』徳本正俊著